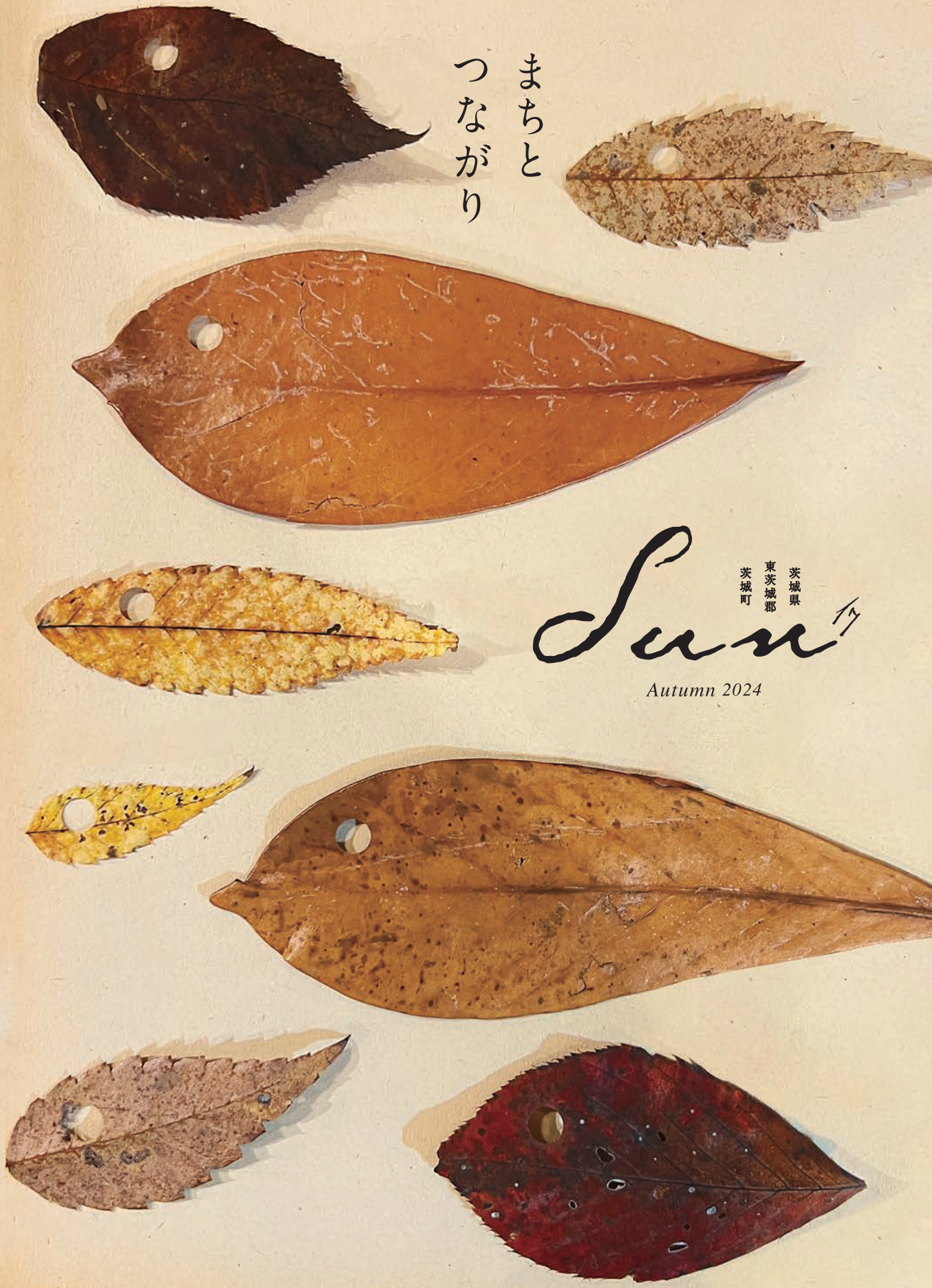
まちとつながり

茨城県
東茨城郡
茨城町

Sun

Autumn 2024



秋旻　鰯雲　黄に染まる地

鵠の声　暮空に響き　明けの凪　立冬を告げる

日々の移ろい　過に触れ　歩を知り

この地に　茨風を生む

Sunは　茨城町と　ゆるやかにつながる　いくつもの縁を

人々の暮らし　情景と共に　綴り伝えていきます

撮影場所:上石崎地区

Contents　目次

03 特集 春告魚を探して
沼と人々のいとなみ

07 みえないものから教わること
人と自然が紡ぐ記憶

10 A SHORT STORY
偶然釣れた

11 まちで暮らす人 まちを想う人

17 連載　マチのケシキ

18 編集室から

Sun
茨城県 東茨城郡 茨城町
Autumn 2024

Cover
“地をおよぐ”
取材で訪れた湖のほとりに
落ちていた葉たち。
この葉たちがすべて魚であるならば
どれだけ豊かな湖であろうか。
そんなことを想いながら
葉たちを泳がせました。

涸沼で毎朝行われるシジミ漁の様子。
漁に出る船の数は多い時で100艘を超える。

特集

春告魚を探して

―沼と人々のいとなみ―

構成｜石川聖太　文｜二川ナオミ・倉田美咲姫　写真｜竹内慎一

「涸沼」と聞いて、あなたは何を想像しますか。
たくさんの水鳥やヒヌマイトトンボなどの希少な生物、湖畔でのキャンプ、釣り人たちの姿。
それとも、やはりシジミでしょうか。
では「ヒヌマニシン」という魚の名を聞いたことはありますか。

ニシンといえば北海道など冷たい北の海で暮らす、身欠き鰊（にしん）や数の子に加工される回遊魚。
そんなニシンが、かつて涸沼でも水揚げされていたのです。
多くのニシンは岸に近い海で産卵をしますが
ヒヌマニシンは産卵のために川を伝い涸沼までやってきました。
豊漁だった年は一日1トン以上もの水揚げがあり
水面を畝らせるほどのニシンの大群が涸沼川を遡上したといいます。
江戸時代の文献にも涸沼のニシン漁についての記載があるほど
長い間人々の暮らしと共にあったヒヌマニシンですが
一九九〇年代以降ほとんど水揚げされず、その姿を消してしまいました。

ヒヌマニシンはなぜいなくなったのでしょうか。その姿は涸沼から本当に消えてしまったのでしょうか。

涸沼でニシン大漁
一尾五百グラムの特大も

――一九六五年（昭和四〇年）二月　新聞掲載

涸沼は茨城町、大洗町、鉾田市に面する関東地方唯一の汽水湖です。満潮時には太平洋からの海水が川を逆流し沼へと流れ、淡水と混じりあう那珂川水系の汽水となります。この涸沼では、特産物としてシジミやウナギが有名ですが、かつてはそこにニシンも加わっていました。ニシンは季節や成長に応じて生息場所を変える回遊魚で、涸沼はニシンが回遊する太平洋側の南限であるとされています。

当時の涸沼の様子を知るために、広浦地区にある大涸沼漁業協同組合へ伺いました。この大涸沼漁協では、かつて全国ではじめてのニシンの人工ふ化や、淡水魚の乱獲を防ぐための禁漁区設定など、持続可能な漁業に取り組んできた歴史があります。話を伺ったのは、組合長の坂本勉さん、副組合長の井川良浩さん、専務理事の石崎豊彦さんです。

「ニシンがたくさん獲れたのは、ちょうどこの〝大涸沼漁業協同組合〟が発足した頃。もともとは茨城町や大洗町、旭村などで個々の漁業協同組合がありましたが、魚の種目によって沼であったり川であったりと漁をする場所が変わります。漁を生業とする者にとっては沼や川で漁場が分けられると困るので、それぞれの漁業協同組合を合併し、組合名の頭に〝大〟を付けました。当時は六〇〇人ほどの組合員がいたそうです」

「ニシン漁をしていたのはわれわれよりもひとつ上の世代ですね。うちの親父もニシン漁に夕方から明け方前まで沼へ出ていて、その帰りを母親が囲炉裏に火を焚いて待っていました。当時はまわりの組合員のほとんどがニシン漁をやっていたと聞いています」と井川さんと石崎さんは話します。

「自分たちではニシン漁はしていないから、実際に漁をしていた方にあたってみましょう」と、坂本組合長は何人かに電話を掛けてくださいました。

群れが来ると水面が盛り上がり「来た」と分かる

最初に話を伺ったのは、大洗町で江戸時代から続く船宿の四代目である田口時男さん。当時は船宿をしながらニシン漁をしていたといいます。

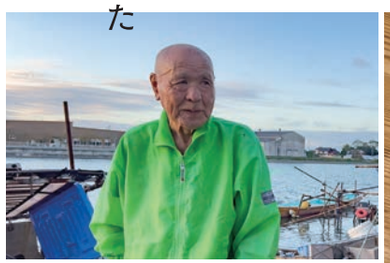
「ニシン漁をするきっかけは、涸沼川の橋の上から釣りをしていたら、たくさんのニシンが竿に掛かったことだった。こんなに釣れるなら網を張った方がよかっぺということで刺し網（*1）でニシンを獲ったんだ。ニシンが来るときは群れで来るから、それで水面が盛り上がって、〝来た〟と分かんだ。ものすごい量で来るものだから、網をニシンに持っていかれた人は何人もいたよ。産卵のために海からあがってくるニシンだから、網にはびっしりと卵が付いてね。この川で獲れるニシンは、普通のよりも大きくて、よく売れた。ちょうど北海道でニシンが獲れなくなった頃だから、ここで獲ったニシンは北海道に送られていたんじゃないかと思うよ。とにかくたくさん獲れるから、夜通しでよくやったなあ。おそらく五年くらいはやったと思う。その後は、ピタッといなくなった。ニシンは突然来て、突然いなくなったんだ」

田口さんのお話を聞いていると、目の前の涸沼川に西陽が差してきました。「ちょうど今くらいからはじめるんだよ」と当時網を張ったあたりを指さしました。

まるでお札が ひらひらと流れるようだった

ニシンの群れが涸沼に向かう様子は、一九八三年（昭和五八年）の茨城新聞の中でも記されていました。大涸沼漁業協同組合の合併設立三十周年記念記事の中で、当時組合員だった方が、「ニシンの最盛期には涸沼川の橋から見下ろすとニシンの群れがまるで千円札が流れていくように見えました。今の人たちには想像もできないでしょうね」と語っています。

もう一人、当時涸沼でニシン漁をされていたという、組合員の中で最年長の山川三郎さんにも話を伺いました。



5ページ右から：早朝の涸沼を案内してくれた組合長の坂本さん。／副組合長の井川さんと専務理事の石崎さん。／新聞掲載記事を纏めて保管している。
6ページ：1969年（昭和44年）2月の新聞記事。／「この川は、金になったんだよ」と語る田口時男さん。／漁師歴は70年を超える山川三郎さん。／ニシンの買取を呼びかけるポスター。
［ 新聞記事・田口時男さん／写真 | 石川聖太 ］

「高校を卒業してからずっと漁をしてるけれども、その頃にはもうニシンはいたと思うな。沼でも刺し網で獲っていて、ほかにすまき（*2）、定置網でも獲った。その当時、まわりの漁師のほとんどがニシン漁をしてたなあ。一晩で二〇キロから三〇キロは獲れたんじゃないか。涸沼川ではもっと獲れたと聞いてるよ。沼の真ん中あたりまでは海水が入り込んでたから、その辺まではニシンが獲れたな。ただ大量に獲れたのは数年間だけだったな」

今朝もシジミ漁をしてきたという山川さん。手のひらを見せてもらうと、分厚いたこができています。涸沼のシジミ漁は機械電力を使わない手掻きの漁で、長い柄のついたかご（カッター）で沼底の土を掻き入れます。長年にわたり漁を続けてきた年季を感じる厚い手のひらです。

「そういえば、三年くらい前かなあ、三、四匹のニシンが定置網に掛かってたなあ。売るほどの量でもないから、近所の人にあげっちまったけども。本当に珍しかったから覚えてたんだ」

二〇一一年（平成二三年）の日本魚類学会での報告では、涸沼のニシンの個体数はゼロとされており、湖内にはいなくなったとみられていたところ、思いがけない証言に出くわしました。漁師さんたちの間では、本当にときどきではありますが、ニシンが揚がったという話は以前からあるそうです。

見えない水の中であるからこそ「もういない」とは言い切れない。もしかしたら今でもいるかもしれない。今回の話を聞いて、幻の魚の息吹をたしかに感じました。

＊1：魚が通過する進路を遮るように帯状の網を張って、魚を網目にさしたり、絡ませたりして獲る漁法
＊2：湖や沼の浅いところに簀垣を設け、魚を捕らえる漁具

大涸沼漁業協同組合
oohinumagyokyo.jp

みえないものから教わること

――人と自然が紡ぐ記憶

文：倉田美咲姫

茨城大学による涸沼の研究は
地域の人々と共に築かれた歴史があります。
幻の魚ヒヌマニシンを追い、人と自然の交わりを見つめます。

十月中旬、涸沼には水面に吹き付ける青北風が響きます。

この日は、茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション助教金子誠也先生のフィールドワークに同行させていただきました。金子先生は、涸沼のヨシ帯に生息する魚類の研究をされています。沼に入る際には、特別な許可を得ている印として旗を岸に立て、ヨシ帯沿いを歩いて調査ポイントへ向かいます。沼底は柔らかい土になっていて、沈んでいる石や木などに足を取られないようにゆっくりと進んでいきます。

いくつかのポイントに設置した定置網の様子を見にいくと、マハゼやニゴイなどの魚が入っていました。大きなニゴイはその場で体長と重さを測定するとそのまま沼へ放します。

私たちも足元に注意しながら歩いていると、シジミ漁をしていた一艘の舟がわれわれに近づいてきて「船に乗っていくか？」と漁師さんが声を掛けてくださいました。「歩いていくので大丈夫ですよ」と応える金子先生は笑顔で、お二人が顔なじみであることがわかります。地域の方に支えられて行われる涸沼での教育・生態研究は、実は一九四九年（昭和二四年）にまで遡ります。

地域の厚意からはじまった涸沼臨湖実験所

茨城大学の涸沼における生物学的・湖沼学的研究は、大学が設立された一九四九年に湖畔にある民家の一室を借りて涸沼研究室がつくられたところからはじまります。その後の一九五六年（昭和三一年）十一月、涸沼北岸の上石崎親沢鼻にある土地を地域の方のご厚意で無償で貸与してもらい、木造平屋建ての涸沼臨湖実験所が建設され、毎年臨湖実習が行われるようになりました。

当時の実験所や涸沼の様子について、実際に実験所を利用されていた茨城大学名誉教授 森野浩先生に話を伺いました。

「私が茨城大学へ赴任したのが一九七五年（昭和五〇年）で、それから五年ほど経った一九八〇年代はじめから涸沼の研究拠点として旧涸沼臨湖実験所を利用するようになりました。当時はすでに臨湖実験所が潮来へ移されていて、調査に必要な道具はソコミジンコを研究されていた菊地義昭先生にお願いしてそこから持参しました。旧涸沼臨湖実験所は実験棟、宿泊棟、倉庫の三つからなる建物でできていて、実験棟では水道・ガスが使えて自炊もできましたし、宿泊棟は実習時に二〇人ほどが泊まれる大きさでした。そこで学生と一緒に飲み会もしましたよ」

右から：定置網にかかったニゴイの大きさを計測する。網の中にはさまざまな魚類が入る。／涸沼臨湖実験所の外観と1966年（昭和41年）発行のパンフレット。／学生たちの臨湖実習の様子。／涸沼臨湖実験所と潮来臨湖実験所の研究実績を纏めた研究業績集。

涸沼の価値を知ってもらうために

涸沼臨湖実験所があった場所やその周辺は、現在は親沢公園キャンプ場として人々に親しまれています。あわせて当時の涸沼の印象も伺いました。

「涸沼の研究フィールドとしての印象は、こじんまりとして扱いやすそうではありましたが、汽水湖の研究ははじめてだったものですから、どう調査していこうか不安に思うところもありました。まずは全体をよく観察するためにまわりをぐるっと歩いて回ったり、ポイントを決めて水質調査を行ったりしました。潮の満ち引きによる水質変化をみるために二四時間体制でモニタリングを行い、そのときは町の漁師さんの力を借りたり、船宿に泊めてもらったりもしました。涸沼は流入河川や潮の満ち引きの影響を受けるため、水質や生物の実態を知るには多くの地点、多くの時間帯での調査が必要でした。フィールドワークは上手くいかないことの方が多いのですが、新しい事象と出会ったときは、なぜそうなるのか徹底的に考え抜くということが大事かなと思います」

「涸沼は昔から漁業や釣り、レジャーなどが盛んでありながら、汽水域の良質なヨシ帯が残されており、そこでは多様な鳥類や魚類、無脊椎動物が生息しています。これらの生息場所の保全と人間活動とのバランスを守るために研究でどんな貢献ができるかということを考えました。涸沼の実態をデータとともに示すことで学術的な価値を地域をはじめとした多くの方に知ってほしいと思っています」

森野先生のお話を伺っていると、涸沼の漁師のみなさん、研究者のみなさんの根底にある「涸沼の自然環境を守りたい」という同じ想いがみえてきます。

過去から現在につながれたバトン

一九六〇年代まで利用されていた涸沼臨湖実験所は、一九七〇年代に入り北浦の湖岸に場所を移し、潮来臨湖実験所が設立されます。この施設が、後に金子先生が在籍する水圏環境ステーションの前身となっていきます。

潮来臨湖実験所には本館と分室があり、分室は老朽化のため長らく閉鎖されていました。二〇一〇年(平成二二年)に取り壊すことになり、当時助教の加納光樹先生(現ステーション長)が学生らと分室に立ち入ったところ、涸沼臨湖実験所時代に収集された魚類標本が大量に見つかりました。それらの標本は一九六〇年代に涸沼臨湖実験所の専任教官であった菊池昶史先生が漁師さんに協力してもらって採集したもので「涸沼　カドイワシ(ニシン)」のラベルの付いたものも多く見つかりました。一九六〇年代の涸沼ではニシンは普通に見られた魚ということがわかります。

加納先生のところで保管されていたニシンの標本は、二〇一一年(平成二三年)四月、当時茨城大学の学生だった金子先生が涸沼の魚類研究を卒業論文のテーマにしたことで、再び調査されました。この標本調査でニシンの成魚だけでなく、仔魚から稚魚の標本が確認され、ニシンは涸沼で産まれて、そこで育っていた証拠も見つかりました。

涸沼と茨城大学との関係は、師から学生へ、そして学生がまた師となって受け継がれています。そこには涸沼で暮らす人々との長きにわたるかかわりがありました。

エピローグ――　わたしたちに春を告げる日

ヒヌマニシンを追いかけたことで、さまざまな人々のつながりが見えてきました。さらに言えば、人間だけでなく、渡り鳥や魚類、昆虫、植物など数多くの生物が涸沼を日々行き来し、交差しています。

昨日シジミが獲れなかった場所でも、今日にはたくさん獲れたり、生物の調査時期や方法を変えただけで、今まで見えなかったことが見えたり。この涸沼は、わたしたちがまだまだ知らないことばかりだと実感します。それは、日々変化し続ける「涸沼」というひとつの大きな生命体と対峙しているようなものなのかもしれません。

今は「幻の魚」と言われているヒヌマニシン。涸沼を大切に想う人々がかかわり続けることで、いつの日か、ニシンが再び海から私たちへ春の訪れを告げにこの沼へやってくるかもしれません。

そのときが来るのを、私たちは心から願っています。

右から：涸沼臨湖実験所の専任教官であった菊池昶史先生が纏めた魚類標本台帳。／1962年（昭和37年）に涸沼で採集されたニシン成魚の標本。／涸沼臨湖実験所で実際に使用していた木製の表札。臨湖実験所跡地（現在の親沢公園）にて撮影。

茨城大学 水圏環境フィールドステーション
cwes.ibaraki.ac.jp

A SHORT STORY

偶然釣れた

文：望月滋斗　絵：Yanna

早朝から振るいつづけてきた釣り竿が、昼前になってようやくヒットした。

釣り上がったのは、小ぶりなニシンであった。

「塩焼きかい？」

どこからか、そんな声が聞こえてきた。

私の右側の少し離れた場所にいる、ほかの釣り人から声をかけられたかと思ったが違うらしい。

声はつづく。

「刺身かい？それとも、フライかい？もうこの際なんだっていいけど、どうか自家製の干物にするのだけはやめてくれよ。濡れた靴下や下着なんかと一緒に、ベランダに干されることの惨めさっていったらないからね」

釣り糸にぶら下がって揺れながら、パクパクと口を動かすニシンと目が合う。

コイツが喋っているのか？まさかと思いながらも、口元に刺さった釣り針をそうっと抜いてやった。するとやはり、声の主は自分だと主張するように、ニシンは堂々とした口調で喋りはじめた。

「それにしても参ったよ。最後の最後で釣り餌に引っかかるとはね。川を泳いでくる最中は、偶然すべて避けてこられたんだけどな。しかも、僕はこの湖――涸沼じゃマボロシの魚だろ。つまりは何が言いたいかって？君が僕を釣り上げたのは、天文学的確率の賜物なんだよ」

「はあ……」

「どうやら実感が湧いてないみたいだね。涸沼での一瞬ごとの出来事というのは、どれもさまざまな偶然が絶妙にかかわりあって生まれているのさ。僕が釣られてしまったのも、君が今朝目覚まし時計よりも早く起きて、ふと釣りにでも出かけようかと思い立った瞬間からすべて繋がっているんだ」

「どうしてそのことを……」

「あれを見て」

ニシンがぎょろりと目をやった方を向くと、近くに停めておいた自転車のベルに一匹のイトトンボが止まっていた。しばらくじっと見つめていたら、イトトンボはふいにどこかへ飛び去っていった。

「トンボが飛べば、そこに小さな風が生まれる。その風はほとりに咲く草花を揺らして、湖面をかすかに波立たせるんだ。今度はその波の音が、水中の小魚たちを昼寝から目覚めさせ――」

刹那、湖面の遠くで飛び跳ねた小魚を、どこからか飛んできたカワセミが鋭いくちばしで捕まえて攫っていった。

「あのカワセミの羽ばたきも、どこかに新しい風を吹かせるよ」

「そして、その風もまた……というわけか」

そのとき、私の鼻先を細く冷たい風がくすぐった。

――ハックション！

大きなくしゃみが出たはずみで、私は持っていたニシンを手放していた。

空中で身をよじりながら、不格好なフォームで湖面へ飛び込んでいくニシン――。

やがて彼が落ちたところにできた泡沫が弾けると、あたりにまたもその声が響いた。

「おっと、偶然助かった」

望月滋斗　茨城町出身。ショートショート作家。
「第20回坊っちゃん文学賞」にて『ライフ・イズ・ア・ムービー』が大賞、『のどぼとけさま』が佳作に選ばれ、W受賞を果たす。
portfolio-mochizukishigeto.my.canva.site/

ショートショート
異空間333歩

まちで暮らす人 まちを想う人

— Feeling × Thinking

自然に触れる人に寄り添う

まちで暮らす人

ＪＡ水戸 南部営農資材センター　坂本成美

写真＝竹内慎　文＝板谷隼

坂本さんは一九九八年茨城県常陸大宮市出身。高校時代まで茨城で過ごした後、東京農業大学に進学。オホーツク海に面し、豊かな自然に囲まれた北海道網走市で学生時代を過ごす。大学卒業後はＪＡ水戸に就職。二〇二一年から茨城町で暮らしながら、ＪＡ水戸南部営農資材センターに勤務しています。

好きを育んだ幼少期

二つ年上の兄と外でよく遊ぶ活発な子どもでした。木登りやキャッチボールをして遊んでいましたね。それから、畑仕事をする祖母についていき、自分専用の畑と花壇で植物のお世話や写生をする時間がとても好きでした。また父親との山菜取りも楽しみでした。これは今でも変わらず、宝探しのようでつい時間を忘れてしまいます。そうして草木に触れながら育ったからか、カレンダーより野菜や花を見る方が季節を感じます。

高校は祖父と父の母校でもある茨城県立太田第一高等学校に進学し、書道部に入りました。小学校一年生から書道教室に通っていて、中学校には書道部がなかったので念願でした。部活の先輩や同級生に声をかけて、文化祭で書道パフォーマンスをしたのが楽しかった思い出です。仲間を集めて何かするというのは、子どもの頃から好きだったと思います。

北海道で感じた地域のつながり

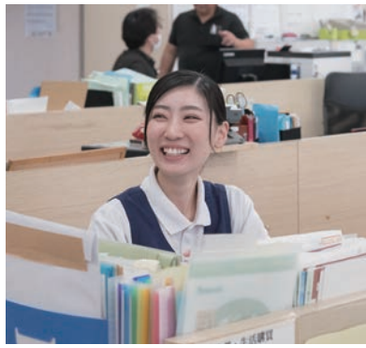
小学校の卒業文集には「お花屋さんに並ぶお花をつくる人になりたい」と書いていました。お花屋さんではなく〝花農家〟になりたかったんです。また、植物園の職員にも憧れていました。そこで、花の勉強ができ、学芸員の資格も取れる東京農業大学生物産業学部生物生産学科（現北方圏農学科）に進学し、四年間をキャンパスのある北海道網走市で過ごしました。

網走での日々は濃密でした。キャンパス周辺では地域と学生が密接な関係にあり、私生活を含めお世話になることも多いです。私も農家さんや漁師さんの元でのアルバイトから、地域の方々と知り合いました。中でも、網走市の観光PRグループ「流氷パタラ」の一員として活動し、そこで仲良くなった議員の方には、とてもお世話になりました。お祭りで一緒にちゃんぽん売りをしたり、冬にタイヤ交換をしてくれたり、私も選挙の際にうぐいす嬢を手伝ったり。今でもよく連絡を取っていて、春にはこちらからメロンを送り、向こうからはさくらんぼが送られてきます。地域の方との関わりが多かったおかげで、網走には今でも愛着がありますし、いつでも帰れる場所だなと感じます。

小さなコミュニケーションを積み重ねる

卒業後は、縁あって茨城県に戻ってくることになりました。学生時代にたくさんお世話になった農家さんに寄り添える仕事ができればと思い、JA水戸に就職しました。仕事内容として、まずは直売所や直売部会の運営があります。直売所では長年働かれているパートさんも多く、わからないことはちゃんと聞くよう心がけています。書道を職場で活かそうと、私の書にパートさんが絵を描き加え、協力して商品棚のポップを作ったこともありました。直売部会では所属する農家さんで集まり、出荷する規格基準の確認や、直売所でのイベント運営を手伝ってもらっています。商品の価格設定をする際には、生産者の方が一生懸命作ったものがお金になる部分なので、ときに言いにくい部分もありますが、市況との比較や根拠を伝えながらお互いに納得できるよう話し合っています。

ほかにも女性部、メロン女性部の取りまとめをしています。女性部は農家に限らず地域の方が所属し、高齢者支援や子ども向けの食育活動、地域イベントへの出店などをしています。メロン女性部は、メロン生産者の奥様が所属していて、コロナ禍前はみんなで東京の市場へメロンの消費宣伝に行っていました。来年は久々に行きたいねと話が出ているので復活させたいですね。



どの仕事も続けるうちに、農家さんやパートさんとの関係がよりよく変化してきたように感じています。直売所でこまめに声をかけさせてもらったり、相談に乗ったりと、毎日たくさんの人との関わりがあるので、日々の小さなコミュニケーションや気配りを積み重ねて、関係性を育てていきたいですね。

近くで寄り添うことを大切に

人と関わるときには、できる限り近い距離で寄り添いたいと思っています。ある部会の会員さんが、怪我をされて会議に出席できないことがありました。怪我のこともあり直接お顔を見に行きたいと思って、会議の内容をまとめご自宅まで伺いました。怪我のことや会議のことなどを話すうちに、ふと雰囲気が柔らかくなった気がして。それ以来お話しする機会や助けてもらうことも増え、いい関係を築けるようになりました。自分から〝人に寄り添う〟ことで、相手が心を開いてくれることを一番感じた出来事かもしれません。このことはこれからも心がけていきたいです。

今後のこととして、女性部の方々と協力して食育活動に力を入れています。生産者の後継問題も踏まえ、子どもたちが食や野菜にふれ、興味を持ってもらえればなと。次の世代に向けて今の世代の人たちが支援する活動には、引き続き力を入れていきたいと思っています。

短さの美学を伝えたい

まちを想う人

ショートショート作家　望月滋斗

写真＝アラタケンジ　文＝二川ナオミ

望月さんはショートショート作家であり、横浜国立大学教育学部の現役学生。二〇二四年一月「第二〇回坊っちゃん文学賞」(*1)にて八〇一四点の応募作品の中から『ライフ・イズ・ア・ムービー』が大賞、『のどぼとけさま』が佳作に選出。これからの活躍が期待される茨城町出身の青年に話を伺いました。

のびのびとした環境で

どのような幼少期を過ごしていましたか。

実家はお寺なのですが、放課後になると境内は近所の子どもたちの遊び場になっていました。友達と待ち合わせをして、木登りやかくれんぼなどをして遊ぶのが定番でしたね。お腹が空くと、近所の「立原パン店」へいって、パンや駄菓子を買ったりしました。当時はそれが当たり前ですが、今思えばかなりのびのび過ごしていたと思います。自分は三兄弟の末っ子なのですが、兄たちと当時流行っていたカードゲームで遊んでいたのも楽しかった思い出の一つです。お小遣いで買えるカードは限られていたので、自分たちでキャラクターの設定を考えてオリジナルカードをつくって対戦させて遊んでいました。むしろ普通に遊ぶよりも楽しかったような気がします。遊びそのものをつくるのが好きな子どもだったのかもしれませんね。

コロナ禍とショートショート

執筆をはじめたのはいつからですか。

大学一年生からになりますが、一年休学していたので今年で五年目になります。入学したのはちょうど新型コロナウイルス(以下コロナ)が流行りはじめたタイミングだったので大学の授業が全てリモートになってしまい、想像とは全く異なる学生生活になってしまったため、休学することにしました。しばらくはアルバイトをしながら図書館とアパートを行き来するだけの生活をしていたのですが、偶然図書館でショートショート(*2)集のようなものを読んで…本当に生意気なのですが「このくらいなら自分にもできそうだな」と思い書いてみたのがきっかけでした。最初は全然形にならなかったのですが、すごく楽しくて。毎日午前中に執筆をして午後アルバイトにいく、という日々を過ごしていました。はじめてからは週に一本、年間五〇本を目標に執筆を続けてきました。コロナがなかったら、ショートショートを書いていなかったかもしれません。

作品はどのようにして生まれるのでしょうか。

ショートショートを書く際には、不思議なアイデアをどんな人物に持たせたら面白い結末になるか、という作品の大まかな骨子を先に決めることからはじめます。設定した結末に導くためにはどのような流れになるか、逆説的に中身を組み立てることで作品に仕上げていきます。話の展開が似通ったものにならないようにするのが結構大変です。ときどき昔の作品を読み返して、下手だな…と振り返ったりするのですが、そう思える位に今の自分が上達しているのかな、とも思ったりしています。

物語の発想は尽きませんか。

偶然の思いつきだけを待っていては年間五〇本のショートショートは書けないので、積極的にアイデアを練るようにしています。ある作家さんの「ものに対してそぐわない形容詞をつける」という手法はよく実践しています。リュックを例とすると、「黒いリュック」だと普通ですが、「温かいリュック」だったり、「踊るリュック」だったり、突拍子もない組み合わせを考えると自然と面白くなるので、そういう組み合わせをいくつも考えて、ひとつひとつノートに書き溜めていますね。

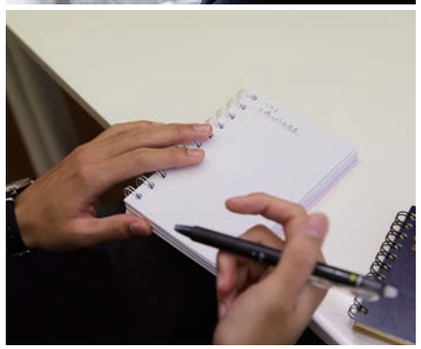
学生から社会人へ　これからの作家活動

受賞されてから反響はありましたか。

毎年、書き溜めた作品は、応募作品数の制限がない「坊っちゃん文学賞」に出品し続けてきました。第一〇回への応募は、落選し続けて四度目の正直になります。ずっと応援してくれていた家族はもちろん一番に喜んでくれましたし、どういう経緯で知ってくれたのかわかりませんが地元の友人も連絡をくれたり。一度、茨城町を表敬訪問する機会があり広報紙に記事を載せていただいたこともありました。今回の取材もそうですが、多方面からの反響がありとても嬉しいですね。春からは出版社に勤めることが決まっているので、編集者としてほかの方の作品に携わりつつ、プライベートではショートショートを書き続けたいと思っています。

故郷を離れて思うことはありますか。

大学に入ったことで、都会生まれの子たちとは幼少期の過ごし方が全然違うことに気がつきました。みんな中学受験を当たり前のように経験していて。子ども時代に友達と境内で遊び、駄菓子屋に行って、川へ釣りに行ってという経験は羨ましがられますね。育った環境を選ぶことはできないですが、自分の作家活動をする上でも絶対に活きているし、都会に出てきても自分を見失わない気がしてきます。茨城町に生まれてよかったな、と思いますね。それこそ自分が生まれ育った環境をモチーフに作品を書いてみたいとも思いますし、地元の文化、言葉を守りたい気持ちもあります。ショートショートは書き方講座や自治体が主催するコンクールがあるので、そういった活動を茨城町で起こすなど、文化的な側面から町を支えるといった関わり方ができたらと思っています。



*1:愛媛県松山市主催のショートショートに特化したコンクール　*2:短編小説よりも短い小説、超短編小説

ライフ・イズ・ア・ムービー
city.matsuyama.ehime.jp/shisei/machizukuri/kotoba/bocchan.files/20th-01-life.pdf

キャンプイベントに参加しました!

涸沼自然公園キャンプ場で行われた
いばらきキャンプオータムフェスタにいば3が参加!
2021年にサポーターのみなさんと一緒に作った
「マチノハーブティー」。
コロナ禍で開催できなかったお披露目イベントを兼ね
ハーブティーの試飲と販売を行いました。
たくさんの方々と交流ができて
とても楽しく貴重な経験になりました!

いばらきデザインセレクション2024 知事選定に選ばれました!

茨城の優れたデザインに贈られるいばらきデザインセレクション。
2024年度の選定に、Sunが知事選定に選ばれました!
これからも、まちの空気を伝える冊子としてサポーターと歩んでいきます。

From Sun –編集室から–

Sun 第17号をお届けします。

ニシンといえば、にしんそばや数の子といった寒い時期の食卓の風物詩ですよね。北海道が産地として有名ですが、まさか涸沼でも獲れていたとは驚きでした。今年のお正月は、いつの日かキラキラと輝きながら群れで遡上するヒヌマニシンを見ることができる涸沼を取り戻せることに思いを馳せながらおせちを食そうと思います。[シロクマさん] ／今ある涸沼の姿はこれまで携わった方々の大切な思いより形づくられた経緯を感じました。これからも涸沼を大事に育てていきたいです。[963] ／幼少期に自然の中で過ごした経験や記憶が、今の自分を形づくっている。私も田舎生まれ田舎育ちで、同じ気持ちをもっていたのでなんだか嬉しくなりました。今後の活躍を期待するとともに、応援し続けたいです。[しげ③] ／人と自然が紡ぐ時間はかけがえのないものであり、私も初めて魚釣りをしたときのことを思い出しました。自然の中で紡がれる喜びや悲しみは、記憶として永遠に残り、語り継がれるのだと思います。[SuzuⅢ] ／Sunを編集していくと、地域の生活が、文化が、経済が、ひいては世界の様々なことが見えてきます。人の営みから生まれる目に見えないさまざまなつながりを、これからも形にしていきたいと思います。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　town.ibaraki.lg.jp/iba3

Sun 第17号 秋号 2024年12月13日発行

企画・発行:いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL:029-240-7148 MAIL:iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン｜i,D
取材・出筆｜倉田美咲姫 二川ナオミ 板谷隼 望月滋斗 石川聖太
写真｜竹内慎 アラタケンジ 絵｜やまなかももこ Yanna
印刷・製本｜株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

参考文献
・茨城県水産試験場試験報告 汽水性水域の水産資源に関する基礎調査-II 茨城県涸沼ニシンの二三の観察（藤本 武・北浜 仁 1964） ・成蹊学園サステナビリティ教育研究センター リレーコラム 半世紀前の標本が明かす、忘れられた、絶滅に瀕した地域個体群の生態。汽水湖涸沼と涸沼ニシン。（猿渡敏郎 2020） ・魚類自然史研究会会報 1960年代の涸沼産魚類標本の発見（加納光樹・金子誠也・碓井星二・百成 渉 2011） ・涸沼臨湖実験所案内資料（茨城大学 1966）

Special Thanks［順不同］
大涸沼漁業協同組合 茨城大学 JA水戸南部営農資材センター
藤沢浩 藤沢愛子 野原しげ子

“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
いばらきまちがつくるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場。
設立から7年目を迎え、
会員数は1,000名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

いば3 WEBサイト

連載
マチのケシキ

第17回 "なにかある"とは

絵｜やまなかももこ 文｜石川聖太

絵:やまなかももこ
画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」（くもん出版）、
「俳万智3・11短歌集 あれから」（今人舎）など。
momokomo.net

普段見慣れた風景こそ
「なんもねぇ」良さがたくさん詰まっているのだと思います。

「このまちはなんもねぇとこだ」

取材で町内を歩いていると、度々この言葉を耳にします。先日も話を伺った年配の方が「なんもねぇ」と口にしていました。そもそも〝なにかある〟とはどういうことなのでしょう。便利なショッピングモール、大きい公園や水族館、史跡などの観光施設、鉄道や空港などの公共交通機関…どれも人が集まる場所といえばその通りなのですが、単にそれだけではないような気もするのです。

先日、町南部の地区を訪れました。平坦な土地に広大な田畑と点在する家々が続いています。秋空の下、畑でさつま芋の収穫作業をする人々。声を掛け合い、手際よくビニールハウスを組立てる様子。木の根に腰を下ろし延々と話をしている老人たち。撮影の合間に見かけたその様子から、この地区ならではの人の営みと、どこかあたたかい雰囲気を感じました。

その土地の風景が、一つの形として人々に広く伝えられ、文化や産業と結びつくことで「なにかある」ということになるのだと思います。

この日見た地域の営みも、これからの世相などによって、その姿を刻々と変えていくことになるかもしれません。それでも、土地で暮らす人たちの表情や思いが伝わるものであってほしいと思います。それらをさまざまな形で人々に伝えていくことが〝なにかある〟ために必要なことです。この連載も、町の景色を通して、地域の〝なにか〟を伝え続けるものであればと思います。

Sun 第十七号 二〇二四年十二月十三日発行 企画・発行 いば3・ふるさとサポーターズクラブ事務局 iba3@town.ibaraki.lg.jp TEL 029-240-7148

Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です